

カメレオンの必然的多様



アニミズム周辺紀行1号ドローイング
キルティプールの丘の図である。右上方に描き込
んでいるのがアニミズム周辺紀行5号に登場する
シヴァ神殿である。この神殿の北の斜面の途中、
小さな平坦地にわたしの終の棲家がある。

S教授より受容的能力について教えていただいた。ただ抽象的な解釈ではなく、イギリスの象徴派詩人ジョン・キーツがシェイクスピアの才能を考え抜いて、それで究めた概念である。キーツはバイロン等と並び称される詩人であるが、早逝した。シェイクスピアの創造の秘密に沢山の種の気持の集合を見抜いたのだ。ひとりの人間の個我の内から生み出される創造ではなく、一〇〇万の気持をシェイクスピアは持つと、つまり詩人とはカメレオンの変化が実体だと、実に二〇一一年の今に通じる創造者の才質の中枢を見抜いていたのである。

S教授にしても、イギリス文化の拡がりをもG・K・チェスタートンのブラウン神父の思考と、アメリカ的思考の素でもあるエドガー・アラン・ポーが黄金虫やモルグ街の殺人で描いてみせた推理の形式の違いから考えるような、一筋縄では理解するに能わぬ多面的結晶の精神の持ち主なので、そう簡単な教え方をするはずもなく、ましてや詩魂についての考究はわたしの手に余るけれど、この考えは物学、より端的には建築デザインの世界にも通じるなど考えた。しかしながらキーツのネガティブケイパビリティ(受容的能力)からアニミズム周辺紀行6を始めたのではあまりにもマニアック過ぎると考え、それで一気に本家本元のシェイクスピアを引っ張り出そう、ついでに日

*1 ジョン・キーツ(一七九五—一八二一年)

イギリスのロマン主義の詩人。

*2 ジョージ・ゴードン・バイロン(一七八八—一八二四年)

イギリスの詩人。イギリスロマン主義を代表する作家で、ロシアをふくむヨーロッパ諸国の文学に大きな影響を与えた。日本では明治以来知られるようになった。

本の織田信長も連れ添わせよう、の乱暴に及んだのである。

シェイクスピア、そしてキーツの生きた時代と今は何も変わらぬとも言えるが、地球上の人口だけは驚くべき大爆発状態に膨張し、同じ星とは考えられぬ有り様なのである。リア王も、今はさまよう荒野も無く、お気に召すままと洒落ている時間もすでに無い。

アニメイズム周辺紀行5で描いた、キルティプールの丘の終の棲家だつて、大気汚染の恐怖は押し寄せているし、近くに眺めていたヒマラヤの峰々の雪の白さも、めっきり薄く小さくなっている現実さえある。キルティプールの丘で夢のなかに棲み続ける時間も、それを直視しようと欲するそれも又、幻を生み出す素としてのモノ、それさえもつくり出し得ぬ非力さそのものだと考えざるを得ない自分も居る。

いざ、ひとたびキルティプールの丘から都市へと降りることにしよう。